

高齢社会の今日、体幹と下肢との連鎖運動の要となる股関節が、加齢に伴う関節変形、転倒による骨折などで股関節機能不全に陥り、円滑な歩行や起居動作に支障を来す高齢者が増加している。股関節機能不全に対する整形外科治療は、股関節のバイオメカニズムを考慮したインプラントの開発、低侵襲術式など、進歩が目覚ましい。そこで本号では、股関節に関わる最新の整形外科治療に連動した効果的な理学療法、生活指導などについて整理し、臨床に直結する特集企画とした。

■低侵襲人工股関節置換術後の理学療法効果（高木三憲，他論文）

低侵襲人工股関節置換術は術後早期より理学療法の開始が可能であり，早期退院・早期社会復帰に可能にし，医療費削減効果を得られる。術後在院日数を短縮している当院での理学療法評価，理学療法プログラム，早期退院に対する指導について概説した。術後短期での自宅退院を可能とするのは，病院全体での取り組みと理学療法士による術前からの患者指導である。これは長期予後の改善にもつながるものと考ええる。

■人工股関節再置換術後の理学療法効果（小澤明人，他論文）

人工股関節再置換術後の症例には，疾患の障害特性を考慮した詳細な評価と ADL 指導を含む理学療法が必要となる。特に再置換術に至った原因とそれから派生する問題点を理解することは，プログラムの立案や理学療法だけでなく，予後予測や ADL 指導を行ううえでは欠かせない。本稿ではこれらに加えて，個性の高い対応ができるよう，生活環境や背景を考慮した指導や心理的な支援，および患者教育の重要性などについて概説する。

■大腿骨頭壊死症に対する関節温存術後の理学療法効果（石原 瞳，他論文）

若年者に多く発症する大腿骨頭壊死症は，関節温存治療が望まれる治療である。大腿骨頭回転骨切り術は，広範囲壊死症例に対し有効な関節温存手術であり，他の股関節手術と異なり，術中に関節包や筋の切離を十分に行うことが特徴である。そのため特に術後の理学療法では，可動域制限や筋力低下，疼痛などを考慮し，股関節だけでなく他関節機能を含めた全身へのアプローチを展開することが重要であると考ええる。

■大腿骨頸部骨折の予防装具（ヒッププロテクター）の効果と転倒予防指導（中村直人論文）

転倒は，高齢者に骨折などの外傷を生じさせる外力源である。それを阻止するために転倒外力を減衰させる手段が，ヒッププロテクターである。本稿では，ヒッププロテクターの有効性のエビデンスをシステマティックレビューから探究し，科学的な妥当性を概説するとともに，転倒予防指導に関わる生活環境についても解説を加える。

■変形性股関節症のバイオメカニクスと ADL 指導（新小田幸一，他論文）

変形性股関節症は加齢に伴う骨の器質的変化が原因となり，疼痛をはじめ，様々な種類の歩行と ADL の障害を引き起こす。また，本疾患は姿勢，アライメントが病期の進行とともに変化する特徴をもつ。このことを念頭に，本稿では理学療法で目指すべき運動学だけでなく，運動力学を含むバイオメカニクスの観点からの知識・技術を修得するために必要な事項を紹介している。